

農総試園芸研究部
野菜研究室ダイアリー



2026 年 10 月

近年、夏の暑さの過酷さが確実に増していると感じます。異常な高温や水不足もさることながら、集中豪雨による災害の発生も珍しいことではなくなりました。ネパールと中国の国境で発生した驚くべき鉄砲水の原因も、温暖化による氷河の融解などが関係しているのではないかと推測が広がっています。災害に見舞われた地域の方々には、心よりお見舞い申し上げます。

私たちの研究室では、夏場は大変な業務が続きます。農家の方々はもっと大変だろうと想像しながら、取り組んでいます。

○真夏の仕事の一端をご紹介します



蒸気ボイラーを使った土壌消毒の様子です。ハウスの中で、100℃を超える蒸気を土の中に通して消毒します。



イチゴ苗の炭疽病の発病状況を調べています。炭疽病は高温多湿条件で特に問題になるので、蒸し暑い専用温室の中で調べます。調査結果を活かして、将来的には炭疽病にかかりづらい品種を作りたいと考えています。



イチゴの育苗ハウスです。ファンとダクトで外の空気を送り込みます。外も暑いですが、室内よりマシかと…



一部のイチゴ苗は、夜間、冷房施設で管理し、花芽誘導します。日中は外に出し、しっかりと水をやります。



トマト栽培試験に向けた施設の改造作業が大詰めです。



紙袋の中身は、1年間育て、カリカリに乾燥させたキュウリの植物体です。

○今年は、夏越え栽培でのナスの試験に取り組んでいます

今年度から、ナスの夏秋栽培（春に苗を植え、夏から秋にかけて収穫する）に関する試験研究に着手しました。愛知県内には、一宮市、岡崎市、豊田市、新城市などに夏秋栽培のナス産地があります。結果が出るまでに少し年月が掛かる見込みですが、お役に立てる成果を出したいと考えています。





たねを蒔き、ポットに植え替えて苗を大切に育てます。



ナスを育てる畑には、支柱と防風ネットが必須です。



畑の準備を整えた直後に突風で壊され、最初からやり直し…、ショックでした。



支柱とネットの復旧作業と同時並行で、苗を定植しました。

○イチゴの早期出荷栽培の試験の様子です

最近の取組の中で、イチゴの新品種「愛経4号」（ブランド名「愛きらり」）の育成と、その特徴を活かした早期出荷栽培の確立は、私たちの研究室の重要な成果です。2026年度からは、普及組織と連携して現地での営利生産規模での実証も開始しました。一層の精度向上を目指し、場内試験にも取り組んでいます。



栽培試験のハウスは屋根に遮光資材をかぶせ、できるだけ暑さを和らげます。温度や湿度などの環境データもモニタリングします。



夏真っ盛りの8月初めに苗を定植し、株元に這わせたチューブに冷たい水を循環させながら育てます。「局所温度制御」という技術で、冬は反対に温水を循環させて温めることができます。

○それにつけても、秋が待ち遠しいです

我が国の流行歌の歌詞や文学作品には、夏の終わりを惜しむようなニュアンスの作品が多いようです。中世後期(14 世紀)に吉田兼好によって書き残されたとされる「徒然草」にも、季節の移ろいの機微に触れた第十九段の中に夏への惜別を描いた一節があります。

ミュージシャンも文学者も夏の温室で働いたことがないでしょうから仕方がないのかも知れません。私たちにとっては、夏はもはや惜別の対象などではなく、できればとっとと過ぎ去って欲しい季節になりつつあります。



そこら中にはびこっている‘最凶の雑木’アカメガシワですら、真夏の日中はしおれ気味です。



愛知県農業総合試験場 園芸研究部 野菜研究室